

アクセス方法
 <電車>
 東京方面から：JR常磐線（特急ひたち）→石岡駅（約1時間）
 水戸方面から：水戸線（特急ひたち）→石岡駅（約20分）
 <車>
 東京方面から：常磐自動車道（水戸方面へ）→千代田石岡IC→石岡市（水戸から約1時間）
 水戸方面から：常磐自動車道（東京方面へ）→千代田石岡IC→石岡市（水戸から約20分）

memo



小さな旅

～こころのふるさとをみつめて～

コブック vol. 128

たいせつな看板
 ～茨城県 石岡市～

2014年1月12日（日）放送

小さな旅 ホームページ
<http://nhk.jp/kotabi>



石岡大火の後、次々に建てられた看板建築。街の復興を担ったのは、全国から集まった左官職人たちでした。職人たちの中心となり、看板建築の多くを手かけたのが、石岡の左官職人・土屋辰之助です。辰之助は昭和6年、大火で焼けた自宅も看板建築として建て直しました。しかし、東日本大震災で外壁の至る所に亀裂が入りました。辰之助の孫で3代目の左官職人・一毛芳昭さん(55)は、仕事のかわら、傷ついた外壁の補修作業を行っています。

看板建築を手かけた職人の家

旅の見どころ 3

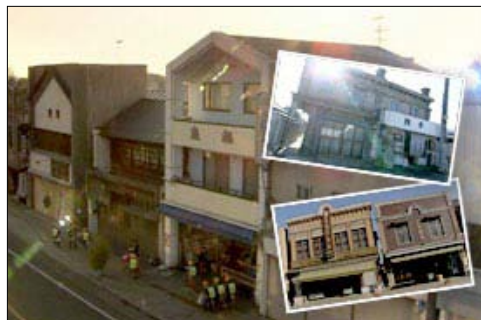


街で最も古い看板建築のひとつ。築68年、女性3代で守り継がれてきた「平松理容店」。西洋風の「イカロス外壁や、古代ギリシア風のフカソウスの葉をあしらった飾りなど、当時の流行を取り入れた「サイレン」から「西洋床屋」と呼ばれる地方の人たちから愛されてきました。現店を切り盛りするのは、3代目の平松美代子さん（62）。初代店主の平松志なさんは、戦争で夫と2人の息子を兵隊にとられ、店をひとりで守りました。そのお代りの「おはし」に職を持ってはくれぬからない」といふ教えを胸に今日も店に立ちます。

“西洋床屋”と呼ばれた店

旅の見どころ 2

商人の町として知られる茨城県石岡市。町の通りには、「看板建築」という西洋風の建物が20軒ほど立ち並びます。町は昭和4年大火に見舞われ、その復興に伴う道路拡幅のために軒先を削った「看板建築」が採用されました。当時の佇（たたず）まいそのままに残る履物店では、80歳女性の手仕事の技が息づいています。そして女性3代で守り継いできた理容店。復興を手がけた左官職人の孫も、その仕事を継いでいます。町の誇り、看板建築に込めた思いに触れる旅です。



旅の見どころ 1
明治時代から続く履物店
 昭和4年の石岡大火の後、中町通りで最初に再建された看板建築「十七屋履物店」。復興のシンボルと呼ばれました。建物中央にある白い飾りは、下駄（げた）に使う材料、桐（きり）の花をイメージしたものといわれています。4代目店主・宮内ゆうさん（80）は、昭和32年、24歳で嫁いで以来、この店を守ってきました。100種類近くの下駄、雪駄（せった）の並ぶ店は、ともに店を切り盛りし、8年前に亡くなった夫との思い出が詰まっています。

